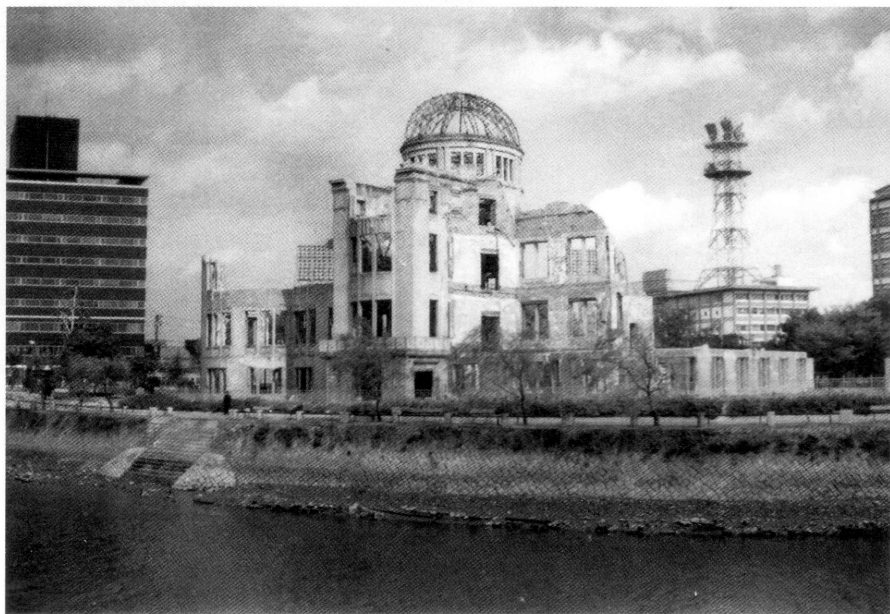


# 原爆ガンと取り組んで 昭和34年8月、平和公園から 全国にテレビ生中継

新井俊一郎 (RCC)



昭和40年代の原爆ドーム

みん  
な  
の  
こ  
ろ  
に  
民  
放  
史

題字 中川 順

ローカルの民放テレビは、いずこも同じ悩みを抱えて発足した。50年前の昭和34年4月、皇太子殿下と妃殿下となる正田美智子さんのご成婚パレードが全国に生中継されることになり、ミッチーブームにあやかっで一気にテレビ受像機が各家庭に普及した。

この国民的慶事を機に、爆発的に地方民放テレビの開局が進んだのだが、このときテレビ放送を開始したRCCラジオ中国テレビ(当時の正式呼称)を含めて、その大多数がラジオ・テレビ兼営局だった。

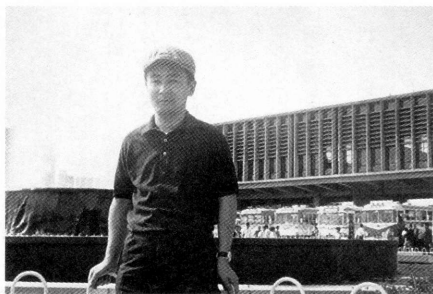
ラジオに比べ、テレビは格段に「ヒト、モノ、カネ」を必要とする。にも関わらず、地方の民放局でテレビの「ノウハウ」などを身につけた者は皆無に等しかった。

かくて広島RCCのスタジオ・VTRともに無い状況下での「ナイナイづくしすべてナマ放送」という、信じられぬ苦闘の2年半が始まった。

平和公園から全国へ  
初めての生中継

昭和34年8月5日、この年春に呱呱の声を挙げたばかりのRCC

テレビは、初原爆特別番組を、広島市の平和公園から、これも初の全国テレビ中継番組としてナマ放送することになった。



原爆資料館前での筆者(昭和40年代)

広島市の南端にそびえる黄金山に建設したテレビ送信所には、スタジオもVTRも持たないテレビ局ではあったがニュースなど最低限必要な自社制作番組の送出機能(テレシネ設備を含む)だけは辛うじて備えられていた。

テレビ局らしい機材として所有していたのは、唯一、3台の白黒カメラを搭載したテレビ中継車と電源車一式だけだった。

その宝物のようなテレビ中継車を平和公園に乗りつけ、電源はシ

テイソースで準備したが、万一の停電事故に備えて電源車も予備に二台並列で駐車した。



中継車と電源車

広島市平和記念館(当時の呼称)では折から広島平和美術展が開催されており、近くの慰霊碑前では「原水爆禁止世界大会」が開かれていた。

その平和記念館のロビーを仮スタジオとしてテレビのセットを組み、照明器具も仮設して全国に原爆特別番組を放送しようという計画だった。

### 『ここにこんな人』

「原爆ガンと取り組んで」

いま私の手元には、色褪せ擦り切れそうになった当時の放送台本が1部だけ残されている。

放送は昭和34年8月5日(水)午後10時からの30分間。RCCテレビからの全国11局ネット。

番組は『ここにこんな人』

「原爆ガンと取り組んで」

出演 内科医 於保源作

聞き手 洪沢秀雄

ゲスト 広島市原対協副会長

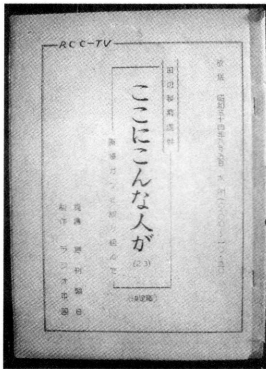
産婦人科医正岡 旭

被爆者 武田武一

提供 田辺製薬

提携 週刊朝日

キー局 朝日放送(ABC)



「ここにこんな人」台本

被爆から60余年を経たいま、よ

うやく原爆の放射能がガン発症の大きな要因であると認知されるに至り、いわゆる原爆症患者としての認定に新たな道が開かれた。

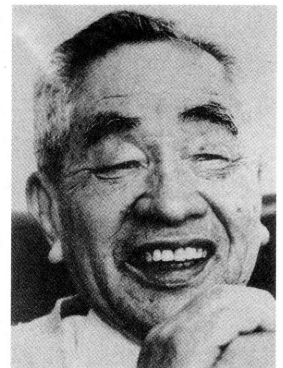
ところが、この放送記録が示しているのとおり、昭和34年8月に、既に市井の内科医から同じ見解が発表されており、更に、まだ新しいメディアであったテレビの電波に乗って全国に報道されていたのである。

昭和34年、平和記念館での  
原子爆弾後障害研究会で

放送台本の一部を転記しよう。

《去る6月13日、爆心地に近い此処、広島市平和記念館ホールで開かれた「原子爆弾後障害研究会」には、日本全国から300人を越える科学者が集まって夫々注目すべき研究発表が行なわれた。そして、如何にすれば恐ろしい原爆の影響を防ぐ事が出来るかという共通の問題について活発な討論が行なわれた。

中でも、一人の町の開業医が8年間にわたる努力の結果まとめ上げた「原爆ガンの統計」という、画期的な研究結果を発表する姿が人々の目を引いたのである。



於保源作先生

この人が、広島市翠町に住む内科のお医者さん、於保源作(おぼげんさく)先生である。

先生は、原爆を受けた人の中でガンの患者が意外に多いことに先ず気がついた。放射能とガンの関係については既に良く知られている……「原爆とガンの関係」、これは詳しいデータを集めて研究しなければならぬ重要な問題だと考えた先生は、さっそく調査に取りかかったのである》

2万枚の調査カードで

原爆とガンの関連を指摘

《それから8年。於保先生は、広島市役所にある死亡届をもとに、この8年間に広島で亡くなったおよそ2万人について、一人一人詳しい調査を重ね、それをこまかく分類して行った。

その結果、原爆を受けた人は、

受けなかった人よりも20%ほど多くガンに罹っているし、ガンに罹る率は爆心地に近い人ほど高く、爆心地近くで原爆にあった人のガンによる死亡率は、普通人のなんと3倍から7倍にも達することが判ったのである。

この研究のためには、先ず、なによりも詳しいデータを集めなければならぬ。そのために先生は比治山のアルバイト学生を使って一軒一軒戸別訪問させ、「原爆調査票」というカードにデータを記入させたのである」

### 科学的に実証された

#### 広島市の医師たちの思い

於保先生が自力で集めた2万枚の調査カードには、こうして全員の被爆地点や詳細な症状などが記録されている一方、「14年も経っているのだから」との回答も多く、もっと早く研究を始めるべきだったと、先生は悔しがっていたという。

原爆の日の前夜、広島から全国へ放送された『ここにこんな人が』(原爆ガンと取り組んで)の番組の聞き手であった渋谷秀雄氏と於保源作医師との対談内容について、

て、於保先生が原爆ガンの研究に取り組んだ動機として幾つかのメモが台本に残されている。

- ・ 実態が失われつつある
- ・ 日本人の手による調査
- ・ 合同診療会での体験
- ・ 科学的データの把握

その当時、広島では原爆症患者の合同診療会も開催されていた。多くの町の医師たちが、みな一様に於保先生と同じ思いを抱きながら、日常的に被爆者と接し続けていたことが、残されている放送台本からも読み取れる。

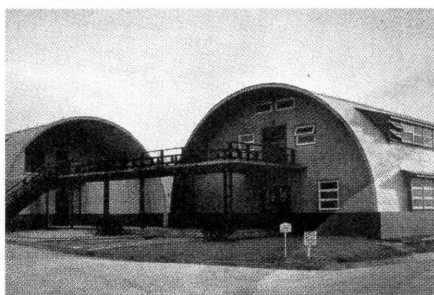


出演者 武田、正岡、於保、渋谷の各氏 (左から)

平和記念館の仮スタジオに並ぶ

出演者は、司会の渋谷秀雄氏と於保源作先生。そしてゲストに産婦人科の医師でもある広島市原対協副会長と、知人の被爆者の4人。対談の内容は、自ずと原爆症とガン、合同診療会と研究会での討議が中心となり、物理学者の発表したデータと於保理論が合致したことが主要テーマだった。

つまり、被爆地点が爆心地から2〜2.5キロまでの場合、放射能によるガン死亡に多大な影響がある、などの事実が科学的に実証されていたという点だった。



比治山のABCC (原爆傷害研究所)

だが、ABCCと呼ばれる米軍による原爆の効果測定調査機関との関係、原爆症研究への政府から

の支援、研究結果が被爆者に与える影響、そして於保先生の研究結果が各界に今後、どのような影響を及ぼすだろうか、などの疑問を投げかけながらも未消化ながら番組は終了した。

### 広島では周知の事実 原爆放射能とガン

広島で実際に被爆者を診察し治療を続けてきた医師の間では、早い時期から、被爆時に受けた一次放射能はもちろん、原爆が爆発したのちの残留放射能も、更には強力な放射能を受けた物体から放射される二次放射能による被曝などについても、重大な懸念が提起され始めていた。

このことは、於保先生が指摘された問題を含めて、被爆から60余年を経た今日、原爆医療法による原爆症患者の認定に当たって、改めて重要な要素として取り上げられるに至った、あの放射能論議の具体的かつ実証的実例そのものではないか。

「原爆ガン」の問題を、被爆から14年目にしてテレビで全国に向けて発言された於保源作先生の先見性と献身的なご努力には、ただた

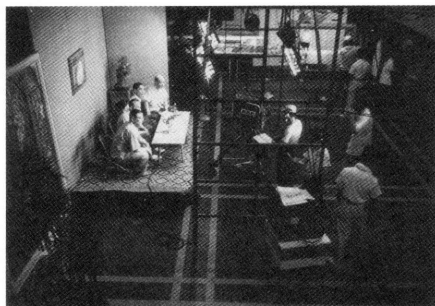
だ頭がさがるばかりである。番組で明らかにされたように、広島では医師による研究会などで早くから原爆の放射能とガンの関連性が指摘されていたことを、いわゆる専門家筋や政府筋は今まで知らなかったか、いや、無視していた……

ローカル民放テレビは

みな難問を抱えて発足

恥ずかしながら、裏話を少々。

『ここにこんな人が』の広島平和公園から全国への生中継は、誕生したばかりのRCCテレビに



平和記念館ロビーのスタジオセット

とって、一大冒険であると同時に絶好の実習チャンスでもあった、だがしかし、責任あるキー局の朝日放送としては新米の地元局に任せっぱなしにはできない

番組CMは現場仮スタジオからのナマ出しであり、おまけに、発局である地元RCCは開局早々として、ナマCMの全国向けナマ放送など全くの初体験であった。

前日のセット組み込みからリハールスの大半は、大阪から大挙して駆けつけた営業とCM担当者、および若干の地元スタッフとによるナマCMに集中した。その只中に放り込まれた私たちは、文字どおり汗みどろの奮戦となった。

ペダスタルドリリーなどあるはずもない。せいぜい、トライポットドリリーに油を差して滑らかさを期待しよう。記念館ロビーの床はフラットだから、なんとかドリリーなどカメラの移動は可能だ。

ケーブルさばき、どうする？

インカムも、カメラ本体から伸ばして使うしかないから、生放送中の行動範囲は限られてしまう。「必要に迫られたら、FD（フロアディレクター）はインカムを外して走れ」となった。

照明も、ありったけ全部を搬入して場内に組み上げたイントレに取りつけた。座談会とCMコーナーの2カ所への応急対策だ。

しかもナマCMたるや、表面が水が流れ落ちる波状のガラス越しに商品のクローズアップを狙ったり、CMアナのバストショットなどどと、4本ターレットの旧式巨大カメラを操作するカメラマンは早くも汗だく状態だった。

フィルムもテロップも

みな送信所からの送出

番組は私と小畑和子女士の2人が、否応なく広島民放テレビでのディレクター第1号という立場



小畑和子氏と

で担当。当日は、小畑さんがテレビ中継車のPD（プロデューサー）卓に座り、私は平和記念館ロビーの仮スタジオ・フロアを担当するFDだった。

準備には何日を費やしただろうか。出演の保先生との打ち合せはもちろん、先生の内科医としての日常など、何度もご自宅ほかを訪ねてフィルム取材を重ねた。

当時は16ミリ白黒フィルムでの撮影であり、音声同録など望むべくもない時代。撮影カメラも、報道から人間も一緒に借用した。

番組中には、そのフィルムによるシーンが結構つづくのだが、なにせ生放送。しかも仮スタジオなので、リハールス中にフィルムシーンが見られない。これには正直参ってしまったが止む得ない。番組タイトルの前CMも、すべてが送信所テレビ室からの送出という、これも大冒険だった。

浅沼委員長刺殺の犯人など

平和公園の世界大会へ乱入

本番中だったか、その直後だったのか今はもう記憶に薄いが、すぐ近くの平和公園から突然、大きな悲鳴と喚声が上がった。

全国から平和行進が到着し、原水爆禁止世界大会も開かれていることから、事件発生と直感した。



「右翼が乱入した」と、現場から情報が届いた。しかし、騒ぎは収まるどころか、慰霊碑前と平和公園全体が凄まじい騒乱状態に陥って行った。

はるか後に私たちは、そのとき右翼の中にいた青年の名前を戦慄をもって知ることになる。

翌年、日比谷公会堂で開かれていた、「総選挙にのぞむ三党首立会演説会」をテレビが生中継している衆人環視のなかで、社会党の浅沼委員長を刺殺した犯人、山口二矢が加わっていたのだった。



立会演説会場で刺殺された浅沼委員長

担当の私たちも被爆者です

小畑和子さんは昭和20年8月6日、原爆で両親と兄、3人の家族を失い、自身も学徒動員先で被爆。

新井俊一郎は、紙一重で被爆死を免れた中学1年生であり、放射能の危険性など全く知らぬまま広島市内を彷徨った。そしてこの2

月、往時の於保先生ご指摘のとおり放射能起因のガンにより、正式に原爆症患者と認定された。

もう、黙ってはおられない、との苛立ちと怒りが、この紙面を借りての発言に至ったとご理解いただきたい。

付言するならば、昭和34年8月5日の夜、広島から全国に向けて

放送された衝撃的な番組に、政府や公的機関からの反応どころか、問い合わせすら皆無だった。

原爆とガンについて初めて声を挙げた於保先生のもとに、政府はもとより関係機関などから調査があったという気配もない。

於保源作先生は平成4年1月14日、市井の内科医として被爆者医療の問題点を初めて世に問い、多発するガン患者の治療に一身を捧げた85歳の生涯を閉じた。

現在も広島市翠町では、於保内科小児科医院の名で源作医師のご子息が、被爆直後の先生と同じように町の医療を担っている。

いま小畑和子さんは、傘寿を迎えて女性教室を主宰。私は喜寿を越えて病軀をいたわりつつ、自由人として生きている。



新井俊一郎

写真資料

於保 信義 小畑 和子  
新井俊一郎 中国放送

ちちをかえせ 峠 三吉

ちちをかえせ

ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ

わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの

にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

峠三吉は被爆による肉体の衰弱のため手術さなかに死んだ。

その12年後、未亡人は自殺したが、被爆による癌の恐怖にうちのめされたといわれた。

しかし、自殺の数週間前、何者かが、峠三吉の詩碑をペンキで汚し、夫人にショックを与えたことも記憶すべきであろう。

大江賢三郎

『ヒロシマノート』から

水ヲ下サイ 原 民喜

水ヲ下サイ

アア 水ヲ下サイ

ノマシテ下サイ  
死ンダハウガ マシデ  
死ンダハウガ  
アア  
タスケテ タスケテ  
水ヲ  
水ヲ  
ドウカ  
ドナタカ  
オーオーオーオー  
オーオーオーオー  
天ガ裂ケ  
国ガ無クナリ  
川ガ  
ナガレテキル  
オーオーオーオー  
オーオーオーオー  
夜ガクル  
夜ガクル  
ヒカラビタ眼ニ  
タダレタ唇ニ  
ヒリヒリ灼ケテ  
フラフラノ  
コノメチャクチャノ  
顔ノ  
ニンゲンノウメキ  
ニンゲンノ  
題不明  
林 幸子  
夜 野宿から



東京高裁の原爆症訴訟を報じる夕刊紙  
(2009年5月28日)

やつと避難先にたどりついたら  
お父ちゃんだけしか  
いなかった  
お母ちゃんと コウちゃんが  
死んだよ！  
ぐったりとした お父ちゃんは  
かぼそい声で 指さして  
(略)  
ああ  
お母ちゃんの骨だ  
ああ ぎゅつとにぎりしめると  
白い粉が 風に舞う  
お母ちゃんの骨は  
口に入れると  
さみしい味がする

「放送を考える会」はどうですかへ  
― 関西民放クラブ会報から ―  
何人かの会員がコーヒーを飲みながら「この頃、テレビはおもしろくないな」とか、「ラジオは某局に『深夜便』を任しておいていいのにか」という話で盛り上がりました。  
まず、テレビ、ラジオは言論情報機関であるべきだ、いや娯楽メディアがすぎるなど、もう現場を離れて10年以上になのに、学生のように、いや昔の若者のように、熱心なシルバーの姿がありました。  
民間放送が開局してすでに60年近い歴史を経てきました。  
しかし、入社時に目指したものと今の放送は次第に遠いものになりつつあります。その歴史や伝統を知っている強みは生かされていないという傾向が強くなっているようにも見えます。  
関西民放クラブには、民放の誕生からの歴史に立ち会った人々が会社の柱をこえて集まっています。「民放文化史」や「民放広告史」(CMなど)を考えるために、それぞれ会社の社事情を踏まえつつ、歴史の生き証人として過去の歴史を振り返りつつ、今後の発展に貢

献できたらと考えています。  
各局の膨大な番組遺産を活用できないか、という念願にもつながります。ラジオ作品の中にはかつてLPレコードになって市販された名作もありますが、その後はワイド化やテープの劣化で影が薄くなってしまうました。  
今、シルバー世代が人口の3分の1になろうかという時代です。かつて番組制作やセールス事務に情熱を傾けた現役の頃を想い起し、インターネット時代に、エリアの共有財産であるメディアの復帰に微力をつくしたいと思います。体力を忘れての願いかもしれません。  
そこで広く「放送を考える会」(仮称)を作り、民放OBたちが同じ舞台に集う研究懇談会の発足、運営を企画しました。  
民放のOBが寄り集まって望ましい放送の姿を思う存分話し合いたいという場の設営です。  
いまの放送について日頃考えておいでになることをお寄せいただきますよう、お願いいたします。皆さんどう思われます？  
《発起人》 沓岐一郎(KBS)  
貝谷昌次(MBS)  
武田朋子(MBS)